森の大学の試みと可能性

――梅光学院大学梅ヶ峠の森におけるフィールド教育――

田　中　俊　明

要　旨

本研究では、梅光学院大学梅ヶ峠の森（仮称）におけるフィールド教育の実践事例を紹介しながら、森の大学の可能性について考察した。梅光学院大学は、旧梅ヶ峠キャンパス（山口県下関市吉見妙寺町365）周辺に、53899㎡ほどの広さの森を所有している。2010年4月より現在までの約2年弱の間、子ども学部（田中俊明教授）の学生を対象とし、毎週2時間程度、梅ヶ峠の森の中でゼミの授業をするという、森の大学とでもいうべき試みを行なってきた。梅ヶ峠の森での授業は、現実の環境と向き合うこと、学生間・学生―教員間のコミュニケーション、過去の経験の蓄積に基づく思考が必要とされる行動がうまくできないなど、現実の環境（森，他者）⇔身体との間の適応的な相互作用の経験の不足にかかわる学生の課題を浮き彫りにするものとなった。その一方で、雨の日も風の日も森という思い通りにならない自然の場所での活動を繰り返すうちに、現実の環境（森，他者）⇔身体との間の適応的な相互作用のループが少しずつくるくると回り出し、他者を含む現実の環境に対する自発的な身体を基軸とした学びや気づきが可能となり、上記の課題が改善されてゆく方向に向かうことが示された。

キーワード：森，自然，大学教育，フィールド教育，里山

梅光学院大学梅ヶ峠の森（仮称）について

梅光学院大学は、旧梅ヶ峠キャンパス（山口県下関市吉見妙寺町365）周辺に、53899㎡ほどの広さの森を所有している。この森の歴史については不明だが、関係者の話によると少なくともおよそ30年前から現在までの間はほとんど手入れされることなく放置されてきたと思われる。

現在まで正確な動植物調査は行われていないが、この森は、スダジイ（*Castanopsis sieboldii*）を優占種とし、アラカシ（*Quercus glauca*）、イスノキ（*Distylium racemosum*）、クロキ（*Symplocos kuroki Symplocos kuroki*）、シロダモ（*Neolitsea sericea*）、タブノキ（*Machilus thunbergii*）、ツバキ（*Camellia japonica*）、トベラ（*Pittosporum tobira*）、ネズミモチ（*Ligustrum japonicum*）、ヒサカキ（*Eurya japonica Thunb*）、ヒメユズリハ（*Daphniphyllum teijsmannii*）、など多数の常緑樹と、コナラ（*Quercus serrata*）、クリ（*Castanea crenata*）、ハゼノキ（*Rhus succedanea*）、ヤマザクラ（*Prunus jamasakura*）など少数の落葉樹が混じりあった森である。また、敷地の一部に、マダケ（*Phyllostachys bambusoides*）とメダケ（*Pleioblastus simonii*）

が存在する。スギ・ヒノキの植林はほとんどされていない。ただし、理由は不明だがスギが数本だけ存在するのが確認されている。

これまでに森の中で観察された昆虫を除く主な動物は以下のとおりである。哺乳類では、アカネズミ(*Apodemus speciosus*)、ニホンアナグマ(*Meles meles anakuma*)、ニホンイタチ(*Mustela itatsi*)、ニホンイノシシ（*Sus leucomystax*)、ニホンノウサギ（*Lepus brachyurus*)、ホンドキツネ（*Vulpes vulpes japonica*)、ホンドタヌキ（*Nyctereutes procyonoides viverrinus*)、ホンドテン（*Martes melampus melampus*)、ヒミズ（*Urotrichus talpoides*）など。鳥類では、アオサギ（*Ardea cinerea*)、アオジ（*Emberiza spodocephala*)、アオバト（*Treron sieboldii*)、イカル（*Eophona personata*)、ウグイス（*Cettia diphone*)、ウソ（*Pyrrhula pyrrhula*)、カワラヒワ(*Carduelis sinica*)、キジ(*Phasianus versicolor*)、キジバト（*Streptopelia orientalis*)、コゲラ（*Dendrocopos kizuki*)、キビタキ(*Ficedula narcissina*)、クロジ(*Emberiza variabilis*)、シジュウカラ（*Parus minor*)、ダイサギ（*Ardea alba*)、ツグミ（*Turdus naumanni*)、ツミ(*Accipiter gularis*)、ノスリ（*Buteo japonicus*)、ハイタカ（*Accipiter nisus*)、ハシブトガラス（*Corvus macrorhynchos*)、ハシボソガラス（*Corvus corone*)、ヒヨドリ（*Hypsipetes amaurotis*)、ホオジロ(*Emberiza cioides*)、ホトトギス（*Cuculus poliocephalus*)、マガモ（*Anas platyrhynchos*)、マヒワ（*Carduelis spinus*)、メジロ（*Zosterops japonicus*)、モズ（*Lanius bucephalus*)、ヤマガラ（*Parus varius*）など。両生類・は虫類では、クサガメ（*Chinemys reevesii*)、シマヘビ（*Elaphe quadrivirgata*)、ツチガエル（*Rana rugosa*)、ニホンアカガエル（*Rana japonica*)、ニホンアマガエル（*Hyla japonica*)、ヤマカガシ（*Rhabdophis tigrinus*）など。

この森は農業用の2つの貯水池の周囲に位置しており、全体的にみると、2つの池に向かってなだらかな傾斜が続くすり鉢状の地形をしている。やや細かく見ると、近くの山へと続く尾根が丘状に盛り上がった場所や緩やかな谷がいくつかあるなど多少の起伏のある地形をしている。高低差の大きな起伏や急な斜面はほとんどなく比較的歩きやすい。

以上、この森は下関地域の典型的な里山の雑木林であるといえる。地形的にも比較的歩きやすいので、この地域の自然を体験したり学習したりするには適した森であると考えられる。

森の大学：梅ヶ峠の森での授業の試み

2010年4月より現在までの約2年弱の間、著者の担当しているゼミの学生10名（2011年4月から新3年生8名が加わり計18名になった）を対象とし、毎週2時間程度、梅ヶ峠の森の中でゼミの授業をするという、森の大学とでもいうべき試みを行なってきた。1泊、2泊程度の焚火で野外炊飯をしながらの宿泊合宿もこれまで5回ほど実施した。ゼミ生のほとんどは、それ以前に豊富な自然体験や野外体験をもっていなかった。ゼミ生は、子ども学部に所属しており、将来保育・教育の道に進むことを希望しているものが多い。授業は、全体のゼミ活動としてゼミ生が協力してこの手入れされていない森を整備するとともに、各自がこの森に関することをテーマに

卒業研究を進めることにより、子どもをはじめ地域の人々に開かれた森を造るというプロジェクトを遂行するという一種のPBL（Project Based Learning = プロジェクト遂行を通した課題解決型授業）のような形態をとった。2年目からは、森の整備と卒業研究に加え、森の中に地域の子どもたちや下学年の学生を招いて自然・野外体験活動をゼミ生らが協力し合って企画実行するという活動を加えた。自然・野外体験活動の企画は現在までで5回実行した（企画の一部は、下関市の深坂の森でも行った）。これらの活動を通して、学生は自らの自然・野外体験の経験を磨き、自然環境教育・保育をするための知識や技術を身につけるという目的であった。教員（著者）は、プロジェクトを直接指揮するという形ではなく、プロジェクトの遂行にあたり学生の自発的・自立的な活動を促進するような助言や援助をおこなうという形で指導することに努めた。

初めの半年は、とにかく森を歩いて森の中の地形や環境、生息する動植物等を把握することが主であった。また、森の中にはケモノ道があるのみで人が歩ける道などは全く整備されていない状況であったので、さしあたりケモノ道を利用し、歩行の邪魔になる枝や下草、低木などを刈り払いながら、ケモノ道を拡張して歩きやすくする作業も行わなければならなかった。学生たちは、道のない森を歩いた経験がないので、自分たちの力で地図を頼りに自分の位置を確認しながら森の中を探索するという行動もままならない状況であった。森へ通って半年以上たっても、森の地形をまだ把握できない学生も若干名いた。クモの巣や虫がいれば大騒ぎになるし、おしゃべりに夢中になって作業や活動はおろそかになるし、しばらくは森に入って歩くだけで精いっぱいの状況であった。森で見つけた動植物の解説をしても、解説の内容を懸命にメモするものの、自分の眼で見たり触れたりなど自分の感覚器官や身体を使って対象を直接的に把握するという行動はなかなかできないようであった。自分の身体(感覚)で外の世界を捉える前から言語化・概念化することで満足してしまい、自分の身体(感覚)を通して直接的に森の自然という現実の環境と向き合うことがうまくできないようであった。また、自分が現実の環境とうまく向き合うことができないということの自覚もないようであった。森で出会った動植物に素直に驚いたり感動したり、興味を持って調べたりといったように、積極的に好奇心や探究心をもって自然に関わることも難しいようであった。受け身の授業に慣れてきたせいか、森という自然に積極的にかかわりさまざまな活動することを通して自分の学びを創りだしていくというスタイルにもなかなかなじめないようであった。同様のエピソードとして、2年目からの森に子どもたちを招待して自然体験活動をするという企画において、新しく入ってきた3年生にその体験活動の企画のひとつを考えてもらったときのことである。やはり学生が森の自然という現実の環境と向き合うことがうまくできないことを示す以下のような出来事があった。森という現場のある体験活動を企画するにもかかわらず、現場の森の状況を一度も下調べすることをしないでいきなり自分たちの頭の中にある自然のイメージだけをたよりに自然体験活動を企画するということがあった。下関周辺の森は、落葉樹が多少混じるものの常緑樹が多いもともと秋に落ち葉の少ない森で、なおかつ落ち葉のまだ落ちない11月初旬の時期に（下関周辺では年にもよるが12月以降にならないとコナラなど多くの落葉樹は落葉しない)、落葉を中心とした自然体験活動を行なうという企画を考えてそれが成功することになんの疑いも抱かなかったのである。秋は落葉の季節という自分たちの頭の

中の自然のイメージだけをたよりに現実の自然環境は無視して企画をしてしまっていることについての自覚はまったくないのである。似たようなエピソードは、これまでゼミの活動を行なう中でさまざまな場面で見受けられた。こうした現実の環境と向き合うことがうまくできない課題以外にも、ゼミの諸活動を行なう中で以下のような課題に直面した。ゼミ生同士（同学年・異学年）の間で、仲よし関係を超えてメンバーの一人ひとりが互いに違うことを認めあい、互いを尊重しあって同じ目的を共有する仲間としての協力体制を築けない。ゼミ生同士のみならず指導教官に対しても必要な報告・連絡・相談がきちんとできない。ゼミ生全員で諸活動の内容の共通認識がうまくできないなど、コミュニケーションにまつわる課題がみられた。また、活動全体を把握し、全体の活動の中での自分の役割を認識して適切に行動することができない。状況の変化を的確に把握して、変化に合わせて臨機応変に行動をすることができない。活動の時間配分や優先順位を考えて計画できない、実行できない。活動の反省をきちんとできないため課題を発見できず次の活動に生かせないなど、状況の認識・判断・予測やメタ認知など過去の経験の蓄積に基づく思考が必要とされるような行動に関わる課題もみられた。状況の認識・判断・予測やメタ認知のような思考を的確に行うためには、過去の記憶の中に類似の構造をもつ状況に直面した経験や自己および他者の行動についての学習の経験をある程度豊富に蓄積している必要があると考えられる。

以上のように、森での授業をはじめてから、現実の環境と向き合うこと、コミュニケーション、過去の経験の蓄積に基づく思考が必要とされる行動がうまくできないなど課題山積、メンバー全員ばらばらで混沌とした活動状況がしばらく続いた。少々困難なことにぶつかると、否定的なことばかり口にして、なかなか建設的・前向きにどうしたらできるかを考えることができずに停滞することが多かった。それでも毎週、雨の日も風の日もしんぼう強く繰り返し森に通い続けた。合宿や自然体験の企画活動も繰り返した。そうすると人間というものは面白いものである。混沌としていた活動状況の中から徐々に秩序が生じて来たのである。活動を繰り返すうちに、上記のような問題を自覚し改善しようとする行動が生じ、ばらばらであったチームワークも少しずつ組織化していき、なによりも学生の中に森という現実の環境と直に向き合い活動に主体的に関わっていこうとする力が生まれて来たのである。4年生にとっては、いまでは森を一人で歩きまわることや森での作業や活動は、特別なことではなく当たり前のことになってきた。森の動植物と直接向き合うこともできるようになってきた。学生によっては、森の生き物に積極的にかかわれるようになり、ヤマカガシやシマヘビを捕まえて飼育する者まで現れた。合宿においても、薪を拾い、火を起こして炊飯をすることになんの違和感もなくなってきたようだ。卒業が近くなった4年生は森での活動がもうすぐ終わりを告げることがどことなくさびしくてしかたがないようであり、やれと言われてもいないのに自分たちでまた森での合宿を企画しようとしている。また、コミュニケーションにまつわる課題や過去の経験の蓄積に基づく思考が必要とされる行動に関わる課題についても、いまでは教員に言われなくても自分たちで積極的にミーティングを開いて改善していこうとしている。4年生は、現在これまでの森でのゼミ活動を3年生にしっかりと引き継いでいこうと積極的に引継ぎ作業の準備を進めている。もちろん学生は一人ひとり

それぞれ違っているので、横並びに一人残らず全員そろって成長するというわけにはいかないし、上記の課題をなにからなにまで解決できたわけではない。まだまだ残された課題はたくさんある。また、2年弱の期間でできることは限られている。しかし見逃してはならない重要なポイントは、森という自分の思い通りにならない自然を相手にした活動を繰り返し続けるうちに、学生の中にメンバー同士協力しながら主体的・積極的に森の環境に関わり生きていこうとする自発的な力が生まれて来たという点にあると思う。森で共同作業や卒業研究をし、薪をひろって火を炊いて自炊して皆で食べる生活、子どもたちなどを招待しての野外体験活動の企画など諸活動を苦にするどころか自ら意味を見出すようになってきた。さらに、森という自然に触れて生きることの充実感や一体感、楽しさや面白さ、解放感や心地よさ、厳しさを乗り越えて生きる自信といったものが自然と身についてきた点にあると思う。こうした感覚の経験が環境へ関わる自発的な力を生みだすモチベーションや報酬になっているようにも見受けられる。そして、4年生各自が、こうした森でのゼミ活動で得た経験や自信を自分の人生に活かして自立的に社会と関わっていこうとする姿勢がみられるようになってきた点にあると思う。もちろんゼミ活動以外にも3年生から4年生にかけて各自さまざまな人生経験を積んできたことであろうしその影響もあると思われるが、いまの4年生の姿は、彼らが3年生であった時の姿とは比較にならないほど自立してきている。

森の大学の可能性

以上見て来たように、梅ヶ峠の森での授業は、現実の環境と向き合うこと、学生間・学生-教員間のコミュニケーション、過去の経験の蓄積に基づく思考が必要とされる行動がうまくできないなど、現実の環境（森，他者）⇔身体との間の適応的な相互作用の経験の不足にかかわる学生の課題を浮き彫りにするものとなった。しかし、雨の日も風の日も森という思い通りにならない自然の場所での活動を繰り返すうちに、現実の環境（森，他者）⇔身体との間の適応的な相互作用のループが少しずつくるくると回り出し、他者を含む現実の環境に対する自発的な身体を基軸とした学びや気づきが可能となり、上記の課題が改善されてゆく方向に向かうことも同時に見て来た。当たり前と言えば当たり前すぎる話であるが、コロンブスの卵的な意味合いで、一昔前までの子どもたちが豊かな自然環境の中でのびのびいきいきと群れて遊んで育ったのと同質の経験を繰り返し与えるような環境づくりが、それを経験して育ってこなかった現代日本の大学生にとって必要なことなのだとこれまでのゼミ活動を通して痛感している。森の大学に吹く風は、現実の環境とのリアルな関係が希薄になってしまった養育環境下で、画一化した知識の記憶に偏った教育に馴らされてしまった学生たちの頭でっかちな頭に身体があることを思い出させ、そのカチカチに凍りついた頭を、身体を経由して他者を含めた環境の大空へと溶かしだしてくれるようだ。

上記した課題は、保育・教育を志す限られた大学生のみに関わる課題ではなく、分野を問わず広く現代日本の大学生一般に共通するものであり、社会から求められている課題であると考えら

れる（経済産業省，2010)。これら学生一般の課題を改善する環境として、梅ヶ峠の森は適していると考えられる。梅ヶ峠の森を、子ども学部のみならず、梅光学院大学の全ての学生に対して上記の学びを実現する演習林として創設し、単発のイベント型ではなく繰り返しのある継続的な授業ができるようプログラム・カリキュラムを工夫し森の大学の学びの場として活用していくことが望まれる。森の大学での学びは、上記の学びに加えて、例えば野鳥や植物など自然観察、森林生態系の理解、俳句等のように感覚を通して自然を文化的に理解したり表現したりする文学や芸術、里山の保全や文化、自然と共にある暮らしの人類学、地域の人々との交流等の地域理解、ナチュラル・リテラシー教育（直接的な自然体験から学び、かつそれに応答してゆく能力：ソベル，2009)、下関地域の森のランドスケープに基づく教育（ソベル，2009）など、アイデアとセンス次第で縦横無尽にさまざまな方向へと森を舞台とした体験的な教養教育の豊かな学びの枝を伸ばしてゆくことが考えられる。

下関地域には、公園や低山は多数あるが、この地域に特有の里山の雑木林の自然の良さを手軽に歩いて満喫できるような森はほとんどないのが現状である。梅ヶ峠の森が演習林として創設され、ある程度整備された状態になれば、子どもたちや老人を始め、地域の人々に自然散策・学習・体験の場として開放することも可能になってくる。森において、さまざまなテーマで学生と地域の人々との交流活動や学習活動を企画できるだろう。また、地域の人々と協力して森を整備・維持してゆく活動へと発展させていく可能性もあるだろう。さらには梅光学院の幼稚園・中学校・高校の園児・生徒の学びの場として広げていくこともできる。

このように眠りから覚め始めたばかりの梅ヶ峠の森は、森の大学として、地域の人々が集う学びと交流の森として、学生をはじめ多くの人々が自然のクオリアをありありと感じながら、人間らしくのびのびとおおらかに心豊かに生きていく上で、不透明な霧を晴らす透明な日光のように明るい可能性を秘めていると考えられる。新しい大学教育のあり方についてひとつの方向を示すものになると考える。また、日本全国各地には放置されて荒れ果てた里山の森がたくさんあり現在問題になっている。こうした森を有効に活用するためのモデルケースのひとつとなることも期待される。

文献

経済産業省（編）2010　社会人基礎力　育成の手引き―日本の将来を託す若者を育てるために　朝日新聞出版

デイビッド・ソベル（訳：岸由二）2009　足もとの自然から始めよう　子どもを自然嫌いにしたくない親と教師のために　日経BP出版センター